



1992年、毛利衛が宇宙へ行った。

当時描かれた来るべき21世紀の未来予想図は、月面基地や宇宙旅行の夢に溢れていた。その様は「国家」や「戦争」という人類に不可欠な要素が描かれなかった故に、現実と大きく乖離した。そこにあったのはユートピアであり、別世界のおはなしである。

1世紀から3世紀にかけて栄えたクシャナ朝の仏像を観る機会があった。それは近未来的な現実味を孕んでいた。既に滅びた歴史は、いつか私たちにも起こるディストピアとしての未来と重なり、文明がループする。

いま見る宇宙開発の記録は、仏像がもつ近未来観を含んでいる。飛行士がヒーローになったことも、崇められる仏像に似ている。

藤森 哲

1 tableau 2020-09(Kushan)

油彩、キャンバス
350.0×185.0 cm 2020年

2 tableau 2021-03(Kushan)

油彩、キャンバス
360.0×185.0 cm 2021年

3 tableau 2021-04(Kushan)

油彩、キャンバス
360.0×185.0 cm 2021年

4 tableau 2021-05(FLORENCE)

油彩、キャンバス
360.0×185.0 cm 2021年

5 tableau 2021-06(Khmer)

油彩、キャンバス
360.0×185.0 cm 2021年

6 tableau 2017-s12

油彩、綿布、パネル
60.6×45.5 cm 2017年

7 tableau 2021-s07(Houston)

油彩、キャンバス、パネル
80.3×65.2 cm 2021年

8 tableau 2021-02(Kushan)

油彩、キャンバス
162.0×162.0 cm 2021年

9 EPIDERMIS

油彩、綿布、パネル
100.0×100.0 cm 2016年

10 tableau 2020-04(FLORENCE)

油彩、キャンバス、パネル
194.0×162.0 cm 2020年

11 質量

油彩、アルミニウム板
91.0×72.7 cm 2016年

12 自由浮遊

油彩、アルミニウム板
91.0×72.7 cm 2016年

13 tableau 2021-01(Kushan)

油彩、キャンバス
162.0×130.3 cm 2021年

藤森 哲 展 往日後来図

2021年12月14日(火)—2022年1月10日(月・祝)

清須市はるひ美術館

藤森 哲 Satoshi Fujimori

1986 神奈川県横浜市生まれ
2011 筑波大学人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻洋画領域修了

個展

2021 「絶対景感」 / コバヤシ画廊、東京
2020 「REAL FICTION」 / コバヤシ画廊、東京
2018 「Closer to」 / 1010 ART GALLERY、神奈川
2017 「hecto」 / コバヤシ画廊、東京
2016 「融点」 / JINEN GALLERY、東京

受賞

2021 清須市第10回はるひ絵画トリエンナーレ 準大賞 / 清須市はるひ美術館、愛知
2021 絵画の筑波賞 奨励賞 / 西武池袋本店アート・ギャラリー
2015 第51回神奈川県美術展 はまぎん財団賞 / 神奈川県民ホールギャラリー
2012 第14回雪梁舎フィレンツェ賞展 ビアンキ賞 / 雪梁舎美術館、東京都美術館
2011 博士前期課程芸術専攻修了制作展 優秀作品賞 / 茨城県つくば美術館

グループ展・公募展

2021 神奈川県美術展 / 神奈川県民ホールギャラリー (2020、2019、2017、2016、2010)
2020 シェル美術賞展 2020 / 国立新美術館 (2017)
おやま豊門芸術祭 うつろいの住処 / 豊門会館和館、静岡
IZUBI Final / 池田20世紀美術館
2018 SICF2018 / スパイラルホール
FACE2018 損保ジャパン日本興亜美術賞展 / 損保ジャパン日本興亜美術館
2017 大黒屋現代アート公募展 / 板室温泉大黒屋サロン、栃木
2016 SEZON ART AWARD 2016 / SEZON ART GALLERY
2015 WONDER SEEDS 2015 / トーキョーワンダーサイト渋谷 (2016、2017)
2015 美浜美術展 / 美浜町生涯学習センターなびあす、福井 (2020)
2014 明日を開く絵画 上野の森美術館大賞展 / 上野の森美術館

モノリスとしての絵画

SF映画の金字塔『2001年宇宙の旅』で、宇宙からの謎の物体「モノリス」に人が触れるシーンがある。一度目は太古の猿人、二度目は未来人で、いずれにとっても得体のしれない「モノリス」に対し、警戒しつつも大切なものを扱うようにそっと手を伸ばす。容姿も知能も文化も大きく異なる彼らだが、未知の存在に対する恐れや崇高さのようなものをともに感じ取っていたのではないかと思う。

見たことがないとか、スケールが大きいとか、超越した美しさとか、人が畏怖を感じるものの特徴はいくつか挙げられるが、自らの力では太刀打ちできないと思わせる圧倒的な存在感・実在感はそのひとつに加えてもよいだろう。藤森哲の作品から受けるのは、そのような実在感による迫力である。

モノクロームの作品は、一見して何が描かれているかわからない。が、単なる抽象表現ではなく、質量をともなった物質が描かれているという感覚はある。明暗対比のシンプルな表現でありながら、無限のグラデーションとして繊細な襞や凹凸を見せる画面。しかし近づいてみるとその正体はおもいのほか粗い筆触（しかし表面はあくまでつりとしている）でしかなく、先ほどまで見ていたものはなんだったのかと狐につままれたような気分になる。

絵画を「リアルの増幅器」と位置付ける藤森は、古今東西の画家たちがおこなってきたように、イリュージョンと呼ばれるテクニックを使って二次元の平面に三次元の物質を「リアルに」描き出しているわけだが、重要なのは現実らしく見えるかどうかというよりも、私たちの眼が何に現実らしさを見いだすかということだ。藤森は題材となるモチーフのイメージを反転させたり組み合わせたりして加工し「リアル」を徹底的に解体したうえで、「リアリティ」だけを抽出・強調して描く。写真やデジタル画像のようにも見えるのは、それが現代の私たちがSNSやネットで見慣れたリアリティだからだ。つまり現実そのものと私たちが感じるリアリティは必ずしも同じではないことを、虚構である絵画は暴き出す。

何かはわからないが確かにそこに何か「在る」ことがリアルに感じられる——濃く煮だされた実在感、モノリスのごとく畏怖にも近い感覚を鑑賞者に与えるだろう。

さて、畏怖というものはおそらく宗教においてもっとも発揮される感覚だろう。藤森が2020年頃から題材に用いた始めた仏像彫刻は、古代の中央アジアにおいて信仰の対象として造られたものだ。その造形を支えた文明はとうに滅び、『2001年宇宙の旅』で描かれた未来は2021年になってもまだやって来ない。文字通り神も仏もない時代で、モノリスとしての絵画は何を問うだろうか。

清須市はるひ美術館 奥村綾乃